

2022年3月6日更新



とうとうおっぴじめたか、ロシアのウクライナ侵攻

2月25日（金） 三上治

テント日誌 2月25日（金） 版経産省前テントひろば後 1807日後～抜粋

期待を込めてということも含めてプーチンはウクライナ侵攻を我慢するのではないか、侵攻は踏みとどまるのではないか、と思っていた。

彼はウクライナ侵攻という賭けに出るかもしれないと想像はしていたが、それは五分五分とみていた。プーチンは予想超えて侵攻という賭けに出たのであるが、この行為にいかなる意味でも言い訳の余地はない。非難するのも馬鹿々々しいほどのことだ。

これは明瞭に言うべきことであると思う。報道にへだたりがあるとか、アメリカ一辺倒だとか、批判や危惧が表明されているが、そんなのはことを明瞭にした上で話である。これははっきり

言っておくべきことである。制裁も含めた対応の問題はいろいろあるにしろ、中国の外相の、理解するという擁護は各国の発言の中で最低である。とても聞くに耐えないものだ。中国の強権的政治を露呈させているだけといえる。

人々の反応というか、評価は様々であるだろうが、僕はなりよりもプーチンのロシア統治というか、プーチン政治は僕らが予想するよりも、深刻な危機的状況にあるということを直観した。

どんな経緯をたどるにしてもプーチン政治の終わりの開始だと予測する。その意味でこの蛮行に反対するロシアの人々の動きになりよりも注目している。

それだけがこの問題を解決していく道であろうとも思えるからだ。ウクライナの人々には深く同情するが、どんな形であれ抵抗は続けることを願う。



あれはまだ、中学の三年生だったと思う。学校の帰りにイギリスとフランスのエジプト介入(スエズ運河支配)に反対するナセルの武装抵抗の報道を知り、深い衝撃を受けた。

イギリス帝国主義批判とアラブ革命に共感した。同じ年のハンガリアでは国内における政治

改革にソビエト(ロシア)が軍事介入し、これに対する国民の武装抵抗があった。当時のハンガリア首相(ナジ)がソ連軍に拉致され抵抗する声をラジオで聞いて興奮した。俺も同じ事態になったら武装抵抗し、戦車に火炎弾で向かっていけるだろうかと思像した。



このハンガリー動乱は戦後のソ連圏(社会主義圏)の解体と崩壊の始まりだった。

敗戦を契機に

拡大したソ連圏(社会主義圏)の解体と崩壊の始まりであり、これはベルリンの壁の崩壊まで続いた。このハンガリア国民の対する軍事加入(軍事的制圧)は社会主義国家に対する帝国主義国家の策謀の排除、あるいは社会主義の自衛の行動という形で正当化された。

ソ連(社会主義国)サイドで。この事件を契機にソ連圏(社会主義圏)への疑念と批判が生まれたが、ソ連の行動を正当化する考え(社会主義の防衛・自衛)というは左翼では強かった。

社会主義圏が崩壊するとか、ソ連が解体するとかということは想像できない絶対的体制という意識は強く、だから、ソ連の行動を擁護する考えも強かった。

社会主義国の核兵器はきれいな兵器であるとか、社会主義国の戦争は正義の戦争だという言説がまかり通っていたのである。(ある時期、日本共産党はそういう言説を取っていた)。新左翼という存在はあり、こうした言説に批判的だったことはあるが、それは少数派だった。



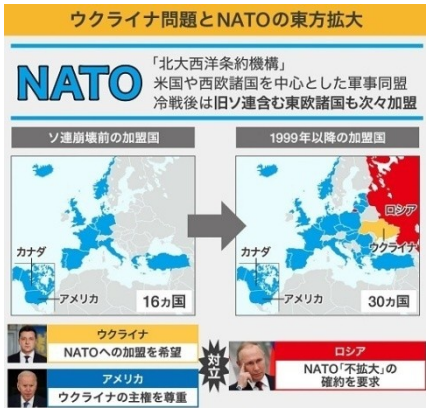
ここで指摘しておきたいことはソ連圏(社会主義圏)の崩壊と解体は、彼らがかつて言ったような帝国主義国からの介入や攻撃で起こったのではないということである。

具体的にいえば NATO 軍の介入や攻撃によってそれは崩壊したのではないということである。

当時、社会主義圏ではワルショワ条約があったが、NATO 軍がソ

連圏の内部国の反権力・反体制的動きに介入し、ワルショワ条約軍を攻撃したことはないのである。

ソ連圏(社会主義)の崩壊はその内で体制(権力構造、統治権力)の矛盾で起こった、つまりは強権的で専制的な権力構造の矛盾の展開がもたらしたのである。このことはよく知っておかなければならない。



プーチンが NATO の拡大が自国の安全保障の危機ということを盛んに宣伝し、戦争の理由にあげるが、NATO 軍がロシアに戦争を仕掛けるとは誰も思っていない。

核保有国であるロシアに仕掛けるとは思ってはいない。こういう言説は説得力がないのだ。

このことをプーチンは百も承知のはずである。なぜこんなことを口実にし、戦争までするのか。

これはプーチンには戦争で解決したい危機があり、その口実にほかの理由がないから、これを使っているだけである。要するに統治権力の危機を戦争によって解消したいのである。その

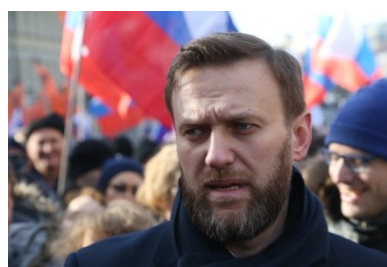
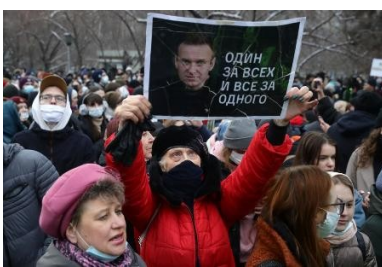
口実にしているだけである。

社会主義圏が次々崩壊し、ソ連も崩壊したのは統治権力のあり方をめぐり問題であった。だから、どう統治権力を作るかが課題であったし、それに成功しなければ政治的不安定を抱えることになる。

社会主義権力(強権的、専制的権力)の後にどう統治権力を創るかは旧社会主義国家の課題であったが、プーチンはイデオロギー的に社会主義というの掲げないが、強権的で専制的な国家権力を存続させた。エリツインの政権もあったから、旧ソ連の統治権力をイデオロギー抜きで再生、保持してきたというべきか。

彼の帝国主義的政治と言われるものである。この展開は中国では徹底した強権的体制としてあり、人々の意識や意思を抑えこむことで、安定しているように見える。

それは批判や政治意思を社会の深部に閉じ込めているだけである。抑え込んでいるだけだ。



プーチンは習近平と似ているといえる。違う点は、プーチンは反体制派というか、そういう部分を抱えていて政治的に不安定であるということだ。

プーチンは強権的に自己の反対派などを抑え込み切れてはいない。

ここにプーチンが戦争に乗り出す大きな契機があると考えられる。戦争はある段階までは統治権力を強める。どのような理由であれ、強い排外主義とナショナルな契機を生み統治権力を強めるのである。統治権力の危機を一時的せよ延ばさせる。

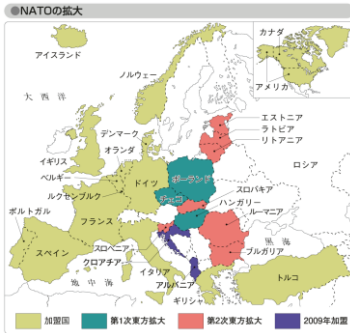
戦争を形成する条件は人々が他(他の国家あるいは共同体)に対して恐怖の共同意識を持つことである。この恐怖の意識はいろいろの形で培われるものである。例えば、9・11 はアメリカの人々に衝撃と恐怖感をもたらした。



これは9・11のビル攻撃の規模と正体不明さが恐怖感を生み出したのだが、時の政府(ブッシュ大統領)は戦争に誘導したのである。も

ともとはこの攻撃は他の国家からしかけられたものではなく、政治グループから仕掛けられたものだから、治安的に警察的に対応すべきことだった。それを戦争にしたのはブッシュが戦争を望んでいたからである。ただ、ここで見ておくべきはここには人々の恐怖の共同性ということがあったことだ。

9・11で生まれた恐怖の共同性をアフガニスタン戦争やイラクまで戦争まで誘導したのだが、その基盤はあったことは見ておくべきことだ。



プーチンは戦争の動機に NATO の拡大によるロシアの安全保障が脅かされるという。これは一般的な国家危機論である。これは一般的なお話というか、通りのいい言葉であるが、少し立ち入って検討すれば根拠がないことがすぐわかる。

アメリカの追い込みかたにそのことは幾分かはみいだせるということはある。アメリカは外交解決を口にしてはいるが本気で外交解決する気はなかった。

プーチンは自己の統治権力のありようが支持を得ない、反対派が多いという危機感がある。

彼の恐怖は自己の統治権力が弱く、絶えず反対派の動きにかき回されることだ。この解決は国民の支持をえる統治権力へ統治権力を変革するしかない。

彼は強権化し、専制を強める形に対応できない。これは習近平も同じである。

プーチンはこのことが自己の統治権力の弱さの解決にならぬことはよくわかっているし、旧社会主義権力がなぜ崩壊したかも熟知しているはずだ。

ただ、彼は旧社会主義権力をイデオロギーだけ抜いて再生させ、保持している。そこで深まる危機に対して、かつてなら社会主義にたいする攻撃としたものを、ロシア国家への攻撃とした対応しようとする。これは NATO の拡大がロシアの安全保障上の危機だという場合の中身である。かつてなら社会主義への資本主義からの攻撃としていたものを、ロシアへの国家攻撃にかえてやっているのである。

ここで実はプーチンは自己の統治権力の危機を、国家危機にすり替えるということをやっている。プーチンは自己の統治権力の弱さ、そこからくる恐怖を、NATO の拡大による恐怖(軍事的に侵攻されるかもしれないという恐怖)にすり替えている。自己の統治権力の弱さを、他国に対する戦争による国民の統治権力の支持で補おうとしているのだ。

そのためには他国(NATO)からの脅威をでっちあげ、そこから対抗的戦争の口実を生みだし、戦争まで仕掛けているのだ。このプーチンの政治的策術はプーチンを支える政治的支持層(官僚)や軍などには一定程度は共有されると推察される、

何故なら、彼らはプーチンの統治権力の危機と国家権力の危機を重ねられる場にあるからだ、彼らには国家危機(プーチンのいう安全保障上の危機)を危機として受け取れる立場にあるからだ。他の国家からの脅威というのは国家権力の立場にあれば、それは受け取りやすいからだ。



それなら国民はどうだろうか、多分、ロシアの国民はプーチンの恐怖感を共同の恐怖感としてはいないように思う。すり替えをわかっているともしえる。ロシアの国民はウクライナ問題に関心が薄いと伝えられるが、多分、これは正しいのであろう。国民はウクライナが NATO にはいればロシアの安全保障が侵される、つまりは戦争状態が生まれるなどとは思っていない。

ウクライナのロシア系住民の権利保護という点では心動かされることもあるだろうが、そこにある政治的工作もわかっているはずだ。ロシア国民は NATO 拡大の脅威、そのための自衛、そのための戦争を必要と思っていない。プーチンは安全保障の危機ということでナショナリズムを喚起しようとするのだろうが、その心的基盤をロシアの民衆は共有していないと思う。

この推測は間違っていないと思う。そして、どんな形になるかロシアの民衆の中から反戦の声は広く出てくると思う。それが戦争の続行をとどめる力になると思う。その可能性は高い。

ハンガリア事件から始まった社会主義圏の崩壊は社会主義権力の内部矛盾によって生まれたものである。この権力を守ろうとした者たちは自己に批判的な部分を軍事的抑圧し、権力を維持した。その口実に帝国主義やそれに連なるところからの攻撃があり、その自衛のためにやったという宣伝をしてきた。

ウクライナ政権の NATO 加盟を同じように使っているのがプーチンだが、プーチンが政権の転覆を呼びかけるというのはその形である。ウクライナ政権がネオナチ的というか、これも帝国主義が攻撃というその類である。自分の方がネオナチなのにそんな批判は滑稽である。

かつてソ連がナチ(ファシズム)と闘ったという歴史がそういわしめるのだろうが、それは古い話でソ連を含めた社会主義権力がかつてのファシズムに類似している強権的、専制的権力であることが明瞭になった現在、こんな批判は当たらない。

社会主義権力が進歩的なものだという幻想が、戦争はいつも帝国主義戦争だという幻想と重なっていた時代があった。これが旧社会主義権力の宣伝を浸透させていた。それで人々を戸惑わせてもいた。そんなことを想起したが、民衆の殺戮と蛮行を見る目を曇らされてはいけないと思った。



アメリカの動きについてであるが、バイデンはプーチンを戦争の方に追い詰めていることはある。これは伝統的なアメリカのやり方である。バイデンの大統領選挙で勝利をした後の宣言を見れば明瞭であるが、アメリカの民主主義は戦争を媒介にしてあるものだ。いうなら戦争を必要としている。戦争の否定を内包する民主主義という現在の課題の民主主義とは相いれない。戦争と民主主義は矛盾するし、非戦と民主主義は両輪のようなものとしてある。

それが現在の民主主義だ。戦争とセットになっているアメリカの民主主義の限界とそれを超える課題を提示したのは戦後の歴史だ。社会主義権力が崩壊したのはアメリカの民主主義の力ではない。冷戦の結果であり、アメリカはアメリカ民主主義の勝利とうぬぼれたのだ。アメリカの権力は民主主義権力であるという幻想を暴いたのはトランプの登場だったが、それに勝利したバイデンは古い戦後のアメリカ民主主義を再確認したにすぎない。

NATO へのウクライナ加盟など NATO 拡大がロシアの国家不安の口実を与えることになっていることは多くのひとが指摘するがそれはあると思う。プーチンの言い分を浸透させることになっている。そこは見ておかなければならない。アメリカの民主主義は対抗的民主主義であり、限界のあるものだ。自立的な民主主義ではない。非民主的な統治権力に敵対視、それを、戦争で持って民主化させるということもやりかねない。これは統治権力の民主主義への転換を統治権力の歴史性を踏まえてやる、つまり内在的に展開していく過程を無視する傾向をもつのであり、戦争でそれを押し付けるということをや。ここは民主主義が統治権力の歴史性を踏まえて、いうなら統治権力の支配をめぐる闘いの中でどう達成するかということで、一番難しいのだが、ここでアメリカ民主主義は問題というか欠陥がある。

今回、口では外交的解決と言いながら、本気でそれをやらなかったことは、ある意味でプーチン

を戦争においやったこともあり、アメリカが結果において戦争に加担しているともいえる。これは僕らが見ておかなければいけないことだ。

テント日誌 3月3日(木) 版経産省前テントひろば～抜粋

プーチンの狂気の行動に驚きながら 3月3日(木)

プーチンが核の使用をちらつかせ、威嚇をしていることは驚きだったが、原発の攻撃までやることはさらなる驚きである。正確な情報か、どうかわからないが、僕の家で購読している新聞には原発砲撃という報道があった、プーチンは今度の軍事侵攻で原発をどうする気なのであろうか、彼は原発を抑え、イラク政権を屈服させるための人質のように原発を使う気か。

正確な情報がわからないから憶測で語るしかないが、この軍事行動で原発がどうされるのか、どう使われるのか、核兵器の使用ともども大変気になることだ。原発と戦争ということは誰も考えないで済んできたことだろうが、僕らは新しい事実というか、事態に直面している、戦争というのは何でもありだということになるのだろうが、原発事故の恐ろしさを見てきた僕らは事態をよく見ておかなければならないし、理由の如何に関わらず原発に手を出すなど言いたい。何をやるかわからないという恐怖が独裁的(専制的・強権的)な政治家や国家権力に抱く恐怖であり、僕らはそれを今、プーチンの言動にみている。



ロシアのウクライナ侵攻から早くも一週間が過ぎたのであるが、僕がここでまず感じることはウクライナの民衆がよく抵抗してみることであり、短期でウクライナ政権を挿げ替えるというプーチンの野望は頓挫したということである。プーチンは次の手立てを考えているのだろうが、短期決戦で軍事的に抑え込みということは難しくなっているのだろうと推察される。

軍事力に非対称的差は、爆撃などでは大きく作用するが、人が決定的になる地上戦では、この軍事力の差は機能しないと思う。各国から義勇兵がかけつけているという報道をみる。僕も若かったら行きたいところだ。軍事経験がなければ足で纏になるだろうが、精神的な支援にはなるのだろうし、それが大事なだろうと思う。

プーチンの軍事的侵攻は文字通り侵略でありこのことは明瞭にしておかないといけない。NATOの拡大とか、ウクライナ政権の動きにロシアの側の戦争を誘発した原因があるとか、情報が偏っているとか、いろいろの見解が流布されているが、ロシアの侵略ということをあいまいにさせてはならない。何故、こんな見解が流布されるのかという二つの理由があるように思う。

一つはプーチンの今度の軍事侵攻がなぜ起こされたのか認識というか、つかみにくいということがある。確かに、NATOの拡大とか、ウクライナ内部のロシア系住民との軋轢とかプーチンが口実にしてもものは理由らしいものとしてある。これは情報としてあるのだが、それを信じるのでなく、こうした言説を検討してみれば、理由ではないことがすぐわかるしろものだ。

もう一つは戦争が帝国主義戦争としてあるという観念があって、これはかつての時代では大きな力を持ってきた。この経済過程に原因を置く、戦争についての理解は一面的であり、第二次世界大戦後はここから戦争を全面的に理解できないということが続いてきたのだが、これが影響している。

第二次世界大戦後の戦争にはアメリカの戦争とともに、社会主義圏(社会主義共同体)の内部で起こった戦争が多くあったのだが、これがきちんと総括(対象化)されずにきたことがある。これは今度のプーチンの戦争をつかまえる妨げになっている。これは主要に統治権力の問題として起こった。戦後の社会主義圏(社会主義共同体)の各国で起こったのは社会主義権力(スターン

主義的権力)への反抗として起こった。その過程で旧ソ連は社会主義圏といわれた諸国に軍事侵攻をした。ハンガリーからチェコやポーランドなどすぐに想起される。この問題は社会主義圏と言われた諸国とソ連の関係が、帝国主義国とその支配下にある国家とに類似した関係であったということと、旧ソ連を含め社会主義国家が独裁的・専制的権力形態をとっていたということにある。

ここでの反乱は独裁的・専制的権力からの脱却を目指すこととして起こったのだが、旧ソ連はすれに戦車を差し向けたのである。プーチンは旧ソ連の立場をロシア帝国の復活(かつての社会主義共同体からロシア帝国へ)という形でその反動的再編を目指している。そして、彼は旧ソ連の独裁的・専制的統治体制をロシア保持することでも反動的対応をしてきた。



彼は旧ソ連が当時の社会主義国家に対して行った軍事行動を、形を変えて行っているといえるのであるが、そこにあるのはロシア帝国の復活あり、専制静的、独裁的統治の保持であり、拡大である。プーチンはかつてのように帝国主義からの社会主義の防衛、あるいは自衛という言葉は使わない。国家危機とか安全保障の確保、ロシア系住民の権利保護などを使う。

しかし、ロシア帝国の復活、あるいは独裁的・強権的統治の拡大という意味で旧ソ連の権力形態の保持を図り、そのための戦争をも辞めないということと似ている。そういえると思う。確かにプーチンは国家主義者であり、ロシア民族とのウクライナ民族との一体性に執着している点でナショナリズムの信奉者かもしれない。彼が独裁的・強権的政治家であり、好戦的なのはそこからきていることを見ておかなければならない。



僕は前回の原稿でプーチンの統治(独裁的、強権的政治)の危機が、僕が想像するよりも深い形で進行しているのではないかと書いた。僕の直感というか、想像は当て外れでないと思う。

ロシア内部の反戦機運は静かに拡大している。情報を遮断し、軍事統制を強めている。ウクライナの市民や地域住民の抵抗とロシアの市民や地域住民の動きはまだ、分断されているが、契機があればどこかで連帯の動きが鮮明になると思う。これはかつての旧ソ連の社会主義国に戦車を差し向けた時とは違っていることだ。(三上治)